# 水とともに生きる

サントリー 白州蒸溜所にて

取締役 技術開発部長
生産推進部 環境部担当
小嶋幸次

環境監査研究会代表幹事
社会的責任投資フォーラム代表理事
後藤敏彦

2002年より、GRI日本フォーラムを立ち上げ、代表理事を務める。サステナビリティ経営など、企業活動と持続可能な社会に関する論文執筆および講演などを多数を行っている。

**あらゆる生命の源であり、サントリーにとってもかけがえのない「水」。サントリーでは、水を守り、育むことを事業の一環としてとらえ、企業活動のあらゆる局面で環境への取り組みを行っています。そうしたサントリーの環境活動について、環境監査研究会代表幹事の後藤敏彦氏とサントリーの環境部担当取締役 小嶋幸次が語り合いました。**

## 「水」の抱えている課題

### 環境に対する認識の転換期

**後藤●**　今年に入ってからIPCC(気候変動に関する政府間パネル)が地球温暖化に関する重要なレポートを相次いで公表しました。また、EUが2月に「2020年までに$CO_2$の排出を1990年比で2割削減する」と発表したり、アメリカが環境問題に積極的にならざるをえなくなったといった状況もあり、現在は環境問題に関する認識の大きな転換期といえます。

そうした状況の中で考えると、温暖化と水というのは密接に結びついています。温暖化により、砂漠化や温度上昇などすでに問題になっている地球環境の変化に加え、降雨の量や場所が変わることが予想され、世界的に見ると水不足は深刻な問題です。「21世紀は水戦争の世紀である」といった本も出ているくらい大きな課題といえます。

**小嶋●**　温暖化と水が深いつながりをもっていることは認識しています。サントリーとしては、$CO_2$削減に関しては京都議定書の精神に則って、政府が定めた達成計画における産業部門目標を前倒しで達成すべく活動しています。もちろん、水を事業の資源として使わせていただいている企業の使命として、工場での徹底した節水や、使用した水をきれいにして自然に返すことはもちろんのこと、水を育てるという意味では、水源涵養(かんよう)にも取り組んでいます。日本各地の工場の上流域の森林を、水源涵養機能が高く、多様性に富んだ森林にすべく、その土地に適した計画を策定し、10年、20年、30年という長いスパンでの森林保全活動を進めていこうと思っています。

## エコカンパニーをめざして

### 先を見据え、一歩進んだ活動が大切

**後藤●**　京都議定書の第一約束期間(2008年から2012年)を1年後に控えて、世界中で温暖化対策が大きく動きだそうとしています。日本も国をあげてさまざまな取り組みを行っていますが、むしろ世界をリードするような政策を打ち出していく必要があると思います。私は、日本の企業についても、諸外国の動きや各種データを参考に、先取りして活動を開始することが重要な時代になってくると思います。

**小嶋●**　おっしゃるとおりですね。国の方向づけや目標を待つのではなく、企業としても、中長期視点での先取りをしていかないと、「待ったなし」と指摘されている環境問題には対応できないと思っています。

**後藤●**　温暖化にともない、水はますます不足していきます。「水と生きる」サントリーも長いスパンでビジネスモデルそのものを見直していく必要があるのではないですか。

**小嶋●**　将来を考えると、環境問題と事業活動との関わ

りを従来以上にしっかりと考えていかなくてはならない時期に来ていると思います。
しかし、私どもの現在のビジネスはお客様の生活に密着した商品をお届けするものですから、現時点でのお客様のニーズを置き去りにして、環境問題の先取りばかりはできません。そこで、さまざまな角度から環境負荷低減をめざして環境と調和する生産活動「エコファクトリー」を一歩進めて、会社全体が環境問題への視点を備えた「エコカンパニー」をめざしていくことが、これからの時代に必要なことなのではないかと考えています。

### エコカンパニーという発想

**後藤●**　サントリーの生産活動は、ここ白州蒸溜所・天然水白州工場を見てもわかるように、さまざまな環境負荷削減はもちろん、バードサンクチュアリ（野鳥の聖域）や生物多様性を考えた森づくりなどを進められていますね。そうしたことをさらに発展させていくということですか？
**小嶋●**　現在「エコファクトリー」の取り組みで行っていることや、各種環境に関する活動を一歩進め、商品の企画からお客様にお届けするまでの一貫した流れにおいて環境視点をもって臨むことができるしくみをつくり、実践していくことができれば、と考えています。それが実現できれば、「水と生きる」企業として真のエコカンパニーになりうるのだと思います。
**後藤●**　その発想はすばらしいですね。具体的にはどういった活動を考えておいでですか？
**小嶋●**　企業としての経済的な発想の判断基準と同様に、環境軸をもった商品づくりをすることです。たとえば、従来から取り組んでいる調達から生産、物流までのすべての過程における省エネ・省資源・節水など環境負荷低減の取り組みに加えて、原料である農作物の持続可能性などを含めた総合的な視点で商品づくりを見直してみることが必要になると考えています。
**後藤●**　最近、国内外の大手小売業が、取り扱う商品に対して認証制度などを始めています。環境に対して負荷の高い商品は取り扱わないという意思表明が進んできたのですね。サントリーを含めた食品業界でも、こうした小売り側からの要請に応えていくことも必要になってくるでしょう。

## 水に対する思いを再構築

**後藤●**　サントリーの水に対する思いとは、地球を愛することそのものだということを理解しました。冒頭にも述べましたが、大きな環境変化のなか、広い視野でサントリーの水に対する姿勢やスタンスを明確にし、次なる活動につなげていくことを、私を含め社会が期待しています。
**小嶋●**　はい。私たちは常に新しい製品を市場に問い、お客様からご評価いただいて買っていただくということを繰り返しています。その結果として、多種多様な市場、マーケットが形成されています。サントリーのような酒類・飲料のメーカーがマーケットをつくるということは、いわば食文化をつくっていくことだと認識しています。私たちが創業以来、変わらずに大切にしてきた、私たちなりの水との接し方、つまり「水とともに生きる」という姿勢を保ちながら、将来を見据えた方向づけを誤ることのないようにしていきたいと思います。
また、企業理念「人と自然と響きあう」やコーポレートメッセージ「水と生きる」を、これからの企業の価値観としてわかりやすく具現化していくことで次のアクションにつなげていきたいと思います。本日はありがとうございました。
**後藤●**　サントリーは「環境コミュニケーション大賞」を受賞するなど、現時点でその企業理念が高い評価を受けているわけですから、変化の時代であればあるほど、次なるチャレンジへ向かっていただきたいと思っています。

### 美しい山々に囲まれた森の蒸溜所「サントリー白州蒸溜所」サントリー天然水のふるさと「サントリー天然水白州工場」

1973年、ウイスキーづくり50周年の年に、サントリー第2の蒸溜所として、南アルプス甲斐駒ケ岳のふもとに開設された「白州蒸溜所」。自然で安全な天然水をお届けするミネラルウォーター専用の現地ボトリング工場として、1996年に稼働した「天然水白州工場」。2つの工場は、採水地のきれいな水を守るために確保された、82.5haの広大な森の中にあります。
ここ白州では、自然との調和をめざし、森林の維持管理や地下水の適正な利用、水質保全に取り組んでいるほか、野鳥の聖域「バードサンクチュアリ」も設置しています。

白州蒸溜所、天然水白州工場

白州の水